

2021・8・17島ノ下



イチモンジチョウの生活史

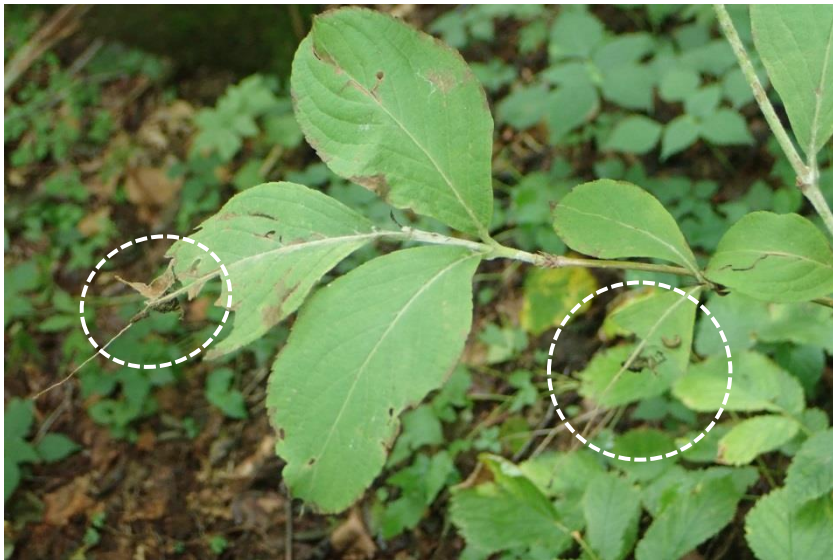
記録的な暑さが続いた後、台風崩れの低気圧が通過、ぐっと涼しくなったお盆明け、いつもの島ノ下の尻岸馬内林道に行ってみました。ここは観蝶日誌で紹介したように親子熊と遭遇した場所。車からなるべく出ないようにして恐る恐る観察を始めました。

目的はベニヒカゲの産卵を見ること。エゾツマジロウラジャノメがときどき飛ぶ崖を抜けると、なんとミズナラの大木が道をふさいでいる。ベニヒの多い崖はもう少しなのはどうしよう。その崖下には前回熊の糞がありフキがバキバキ食われていたところ。うーむ。進むべきか退却すべきか。少し悩んだ後、ヒグマ対策の基本、自分の存在を伝えながら進むことを決断。車を離れ「おい。来たぞ！」「帰れ！」などと叫びながらポイントに近づいていく。



ベニヒカゲは飛んでいました。高温の日が続いたためか、いつもよりお疲れの姿。時々「おーい！わあー！」と意味不明に叫びながら♀の動きを追いかける。吸蜜はするが全然産みそうにない。他の蝶も古びたサカハチの♀がタッチングするくらいで…何も成果がないのか。

タニウツギの葉を見るとイチモンジの巣がついている。これもいつものことだしなあ…と思いながらも少し撮影すると、なんだか空の巣が目につく。ちょっとカウントしてみるか、とフィールドノートを取り出し記録することにした。



そこで今回記録したことも含め、この島ノ下のイチモンジについてまとめて紹介することにします。



葉の表面に産卵する♀



産付直後の卵

イチモンジの生活史を簡単にまとめておきます。北海道では年1化です。初夏に発生した成虫はタニウツギなどの食樹の葉に卵を産みます。葉の先端に糞塔やカーテンを作りながら成長し2～3齢で越冬用の巣をつくり休眠に入ります。翌年葉が出始めると巣から出て若葉を食べ成長し蛹化します。この島の下的林道はタニウツギが多く、行くと必ずどこかのステージの幼虫を見ることができ、図鑑にもこの幼虫の写真が使われています。幼虫は体に突起がありその大きさから齢数を推定することができます。まず1～3齢の幼虫を紹介します。

1齢 体の刺毛や突起は目立ちません



糞を中脈にくっつけています

2齢 体に刺毛が見えてきます



葉は全部食べず食いかすが残ります

3齢 体の刺毛が大きくなります



カーテンが糞と混じって塊になります。



3齡(一部2齡)になると越冬用の巣をつくります。いつもの巣から離れ、その枝の下の方についている小さな葉を利用することが多いようです。吐糸で葉の両側を結びつけますが開いて中が見えるものもあります。

雪が降る前9月頃には越冬巣用意されています。



4 齡

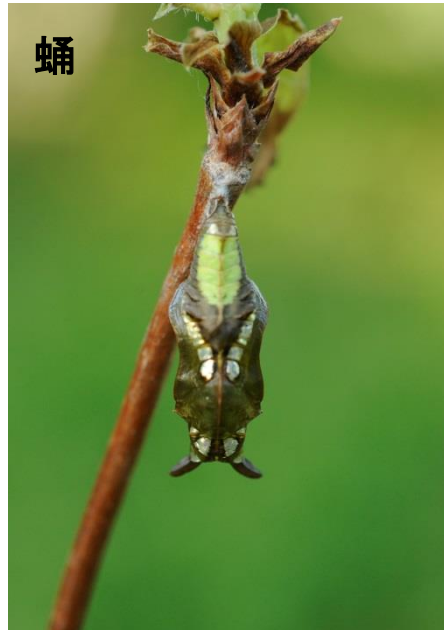


越冬後の脱皮した4齡は緑色に変わり独特のポーズで葉の基部に静止します。終齡は刺毛が大きく発達し少し恐ろしげな姿になります。蛹は枝にぶら下がります。耳のような突起や背面に銀色に光る斑紋もあり異様な姿です。

終齡



蛹



さて、今回はタニウツギの巣をみては、幼虫がいたらその齢数、殻の巣であったら食痕やカーテンの状況から何齢の巣であったかを判断して数を記録していきました。

これは1齢の巣で脱落したものの64個体カウントしました。



これは2齡の巣です。この段階で脱落したものを71個体カウントしました。食痕が広がり、糞と葉の塊がついています。



これは1齢です。8個体いました。



これは2齢です。20個体いました。



これは3齢です。14個体いました。

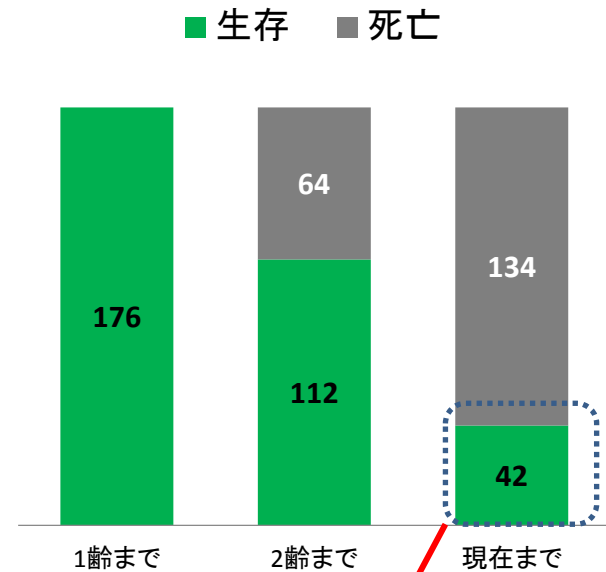


さて、以上のデータからここ(8月17日)まで生き残ってきた状況を分析してみました。幼虫は3齢までは最初に巣を作り始めた葉で生活しています。1齢の巣が64個残っているということはここから次には進めなかったということです。そこで8月17日までの生存数を推定することになりました

孵化した幼虫から、ここまで生き延びたのは全体の23.9%でした。約4分の1は途中で死亡脱落することです。

今回生存していた幼虫にマークをしておけばよかったのですが、次に行ったときにはマークして越冬が成功する割合なども見られたらと思いました。

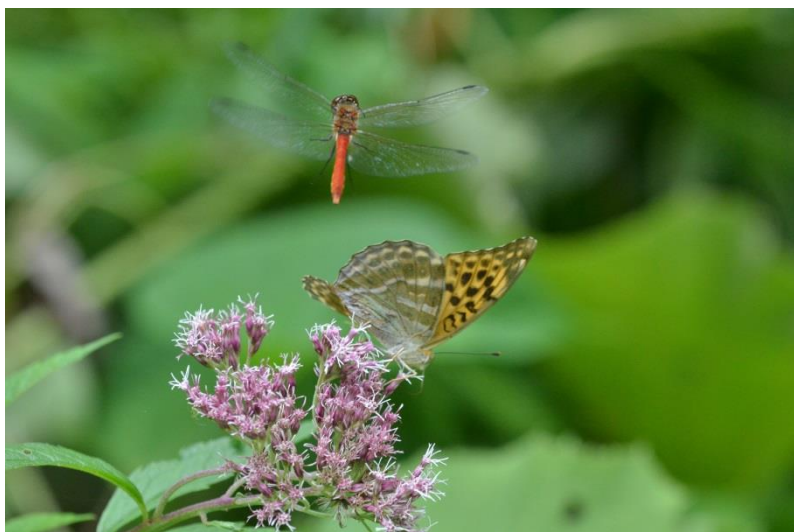
8月17日までの生存数の変化



8月17日幼虫の齢数



ヒヨドリバナにミドリヒョウモンとアキアカネ、秋を感じながら帰路につきました。とりあえずの恐怖と闘いながらの観察記録でした。



T, Nagamori